網漁

手間と時間、資本を投下

魚を一度に大量に捕りたい。そのためには「網」を使うのが一番です。琵琶湖では多様な網漁が行われています。主なものとしては、魚の通路にカーテン状の網を張り、網目に魚を絡ませて捕るコイトアミ漁（刺し網漁）、湖底で袋状の網を曳きながら魚群を網の中に囲い込むチュウビキ網漁・地曳き網漁、魚に網をかぶせる投網漁、押し網漁、魚の通り道に網を沈め引き上げて魚を捕る四つ手網漁などです。

網漁とは、どのような性格を持っている漁でしょうか。私たち、文化財調査員が扱う時代の網漁を見てみましょう。まず、網自体の特性としては、良質の繊維を大量に使わなければなりません。特に、魚を絡めとる刺し網には、より細く、よりしなやかな繊維が必要です。化学繊維が出回るまでは、コアユやモロコを捕るコイトアミには、絹糸が使われていました。このような繊維は、繊細で水に漬けておくと弱くなってしまいますので、防水、撥水加工が必要になります。このため、最近まで、網を柿渋に漬けて網をシャキッとさせることが行われていました。それでも網は痛みます。穴の開いた網は役に立ちません。漁が終わったら網目を繕うメンテナンスが不可欠です。さらにコイトアミの場合、対象とする魚の大きさ（種類ごとの大きさもありますし、魚の成長の度合いによる大きさもあります）の違いにより、網の目を変える必要があります。ですから、漁師さんは、多くの網を用意しておかなければなりません。

次に、漁のしかたを見てみましょう。網漁は、琵琶湖の沖合で行われることが多く、漁場に行くのに船を必要とします。船は、値段が家一軒分ともいう高価な道具です。地曳き網などの大型の網漁では、多くの人手を動員する必要もあります。

このように見てくると、網漁は、網のメンテナンスなどにふんだんに時間をかけることができて、かつ、高価な漁具をそろえられる者が行う漁。つまり、より専業的な漁師さんが行う漁であるといえます。言い換えるならば、これだけの手間と時間と資本を投下しても、利潤を生むだけの魚を捕ることが可能な、効率的な漁法であるといえます。

湖国に春を告げるコアユを捕るオイサデ網漁

写真にあるのは、湖国に春を告げるコアユを捕るオイサデ網漁の様子です。春になるとコアユたちは湖岸に群れをつくるようになります。1人は、コアユの群からやや離れたところに網を沈めて待ちます。別の2、3人は、竿の先にカラスの羽を付けた「ウザオ」と呼ばれる道具でアユを驚かせ、網の中に群れを追い込みます。網に入ったのを見計らって、網を持ち上げ、中に入ったアユを生け簀に移します。この漁を効率よくやるためには、5、6人の漁師さんが組を作って行う必要があります。オイサデ網で捕られたアユは、放流用や養殖種苗として全国に出荷されます。

（財団法人滋賀県文化財保護協会　大沼芳幸）